

問題1

目標

- 一 文章を主観的に解釈するのではなく、客観的に読む力をつける。
- 二 文章の筋道(論理)を追うことで、論理的に考える力をつける。
- 三 小説のあらすじを理解する。
一文には、主語と述語、飾る言葉や飾られる言葉といった論理の関係がある。さらには一文と一文がまとまって段落を作るのだが、一文と一文の間にも論理的关系がある。そうした段落と段落が集まって、文章の全体を作り上げるのだが、そこにも論理的な関係がある。そうした文章の論理を読み取る力を養っていくこと。

第一問

■解答

問一 エ 問二 よだか(は)

■解説

問一 論理的読解力B「文と文との論理的関係を把握」

①「よだかがみにくい鳥」と述べた後、②「顔」「くちばし」、③「足」と、よだかがいかにみにくいかを一つ一つ具体的に説明している。

問二

論理的言語力「主語と述語の関係」

一文の構造を、論理的に把握できたか。「足はよぼよぼ」「よだか(は)歩けません」と、一文の中に「主語と述語の関係」が複数ある。「歩けません」の主語は省略。

第二問

■解答

問一 たとえば 問二 ウ

■解説

問一 論理的言語力「接続語」

接続語は文と文との論理的关系を示す言葉。文と文との関係をつかまえたかどうか。

「ほかの鳥」に対して「ひばりも」とあるので、「よだかの顔を見ただけでも、いやになってしまう」例として、「ひばり」をあげた。

問二

論理的言語力「助詞」

語句と語句との論理的关系をつかまえたかどうか。ひばりがよだかにあうと、首をそっぽへ向ける理由が、空

測定する能力			
論理的言語力	論理的読解力A	論理的読解力B	論理的思考力
日本語を論理的に扱う能力。 一文の構造を論理的に掴まえたり、「ことばのつながり」、小説などを客観的に読む指示語、接続語などを論理的に扱う力。	文章を論理的に読む力。 趣旨を的確に把握する力。	文章構造を論理的に解説する力。文と文との論理的关系、段落と段落との論理的关系、文章全体の論理構造を把握する力。	文章の要点を論理的に整理し、まとめる力。論理的に説明する力。おもに記述・論述力。
			他者に向かって、論理的に話す力。論理的に思考し、自分の考えを論理的に書く力。

所直前の「ひばりも、あまり美しい鳥ではありませんが、よだかよりは、ずっと上だと思っていました」であることから、「ので・から・ため」などの理由を表す接続助詞を入れる。

第三問

■解答

ア

■解説

論理的読解力B「会話での論理」

鷹の話の筋道を理解できたかどうか。「鷹」は神からもらった名前だが、「よだか」は、「夜」と「鷹」から名前を勝手につけたということ。さらに空所直後に「さあ返せ」とあるので、「借りたもの」だと分かります。

第四問

■解答

問一 改名の披露

問二 そこで

■解説

問一 論理的言語力「指示語」

指示語は直前から順に考えること。「改名の披露」というものをしてないといけない」が該当箇所だが、「五字以内」という条件に注意。

問二

論理的言語力「接続語」

「名前をつける」改名の披露をする」といった論理の流れになっている。「しかし」「でも」は逆説。「たとえば」は例示、「つまり」は、言いかえ・まとめ。

第五問

■解答

夜だかの

■解説

論理的思考力「語を並べ替えて一文を作成」

まず主語と述語を考える。主語は「甲虫が」、述語は「はいて、」と「もがきました」。後は、「ことばのつながり」を考える

第六問

■解答

(1) ア (2) ウ (3) イ

■解説

論理的読解力B「会話での論理」

泣きながらぐるぐる空をめぐっている夜だかの気持ちを論理的に整理できたかどうか。

各文の接続語や指示語など、文法的根拠に着目。

ウの順接「そして」に着目。さらに「そのただ一つの僕」の「その」が指しているのは、ア「毎晩僕に殺される」の「僕」。

そこで、ア→ウの順番。さらに(3)の直後の「その前にも鷹が僕を殺すだろう」の「その」は、イ「飢えて死のう」を指す。そこで(3)にイが入る。

このように、主観的に文章を読むのではなく、文章中の論理にしたがって、客観的に読む訓練が必要。そうすることで初めて論理的に考えることが可能。

(生きていくためには多くの羽虫を殺さなければならない。それがつらくて仕方がない。だから、いつそのこと飢えて死のうと、夜だかが思ったのです。)

第七問

■解答

- (1) どうか (2) てんで
- (3) やつと (4) 一体

■解説

論理的言語力「副詞」

副詞は用言(述語になる語)を飾ることだから、用言との関係から考える。
 1 「どうかく下さい」で、願い事をするときに使う。
 2 「てんでくしません」で、「まったくしない」の意味。
 3 「やつとく」で、「かろうじて(なんとか)く」の意味。
 4 「一体くだい」と、副詞の呼応(決まり切った関係)。

第八問

■解答

- 問一 氷 問二 のろし

■解説

論理的言語力「言葉のつながり」

問一 空所直前に「氷山の浮いている海」とあることから、判断。

問二 論理的読解力A「比喻」

比喻の問題。地面すれすれから、一気に空へ飛び上がった様子をたとえたもの。
 甲虫やとんぼでは、一気に空高く飛び上がることはできません。霧は拡散していくもの。

第九問

■解答

星

■解説

論理的読解力A「比喻」「物語のあらすじを理解する」

本文末尾に「よだかの星は燃えつづけました」とあることが、根拠。

問題II

目標

- 一 筆者の主張を読み取ったか。
- 二 筆者の立てた筋道を理解したか。
- 三 論理的にものを考えることができたか。

■解答

- 問一 ない↓
- 問二 エ

■解説

論理的読解力A「誤文訂正」

「わたしの主張」は、声がわたしの全体を伝えることができるということなので、「わたしの存在全体を伝えることができない(3行目)」が間違い。そこで、否定文を肯定文に直さなければならぬ。

問二 論理的読解力B「文章全体の論理構造」

冒頭の、「声って、普段はあまり意識しないけど、実はとっても大切なものだと思います。なぜなら、声って自分の思い全部を込めることができる」が、わたしの主張。
 次にそれを裏付けるために、「おはよう」というあいさつの体験話を持ち出したのである。そして、最後にもう一度、「声って、本当に不思議です。わたしの全部が声によってじかに相手に伝えることができるからです。」と、わたしの主張をくり返している。

まとまった論理的な文章には、必ず筆者の主張がある。筆者は自分の主張を誰だか分からない読者に向けて、筋道を立てて説明しなければならぬ。その筋道が論理だが、文章を読むときは、その作者の立てた筋道があるがままた追っていくことに他ならない。問一が難しかったかも知れないが、論理を追っていくことができれば、論理的に矛盾している箇所を発見できたはずである。

問題III

目標

- 一 文章の論理構造を読み取ったか。
- 二 主旨をつかめたか。
- 三 正確で、筋の通った文を書けたか。

■解答

- 問一 ところが、
- 問二 日本のもともとの芸術は、生活を美しく飾ること(でした)

■解説

文章を論理的に読んだかどうか。

問一 論理的読解力B「段落分け」

対立関係に着目。前半は現代の芸術のありようについて、後半は本来の日本の芸術のありよう。

三行目冒頭の「ところが」(逆接の接続詞)をチェックしたかどうか。

問二 論理的読解力A「要点を掴まえる」

「もつとも主張している箇所」とあることに注意。筆者が一番言いたいことは何か。

冒頭、現代の芸術鑑賞の仕方が述べられている。私たちは絵画なら美術館でガラス越しに眺める。では、現代の芸術鑑賞が筆者の言いたいことかというところ、逆接の「ところが」に着目。逆接で引っぱり返しているのは、その後に筆者の主張が来る。

「日本のもともとの芸術は、生活を美しく飾ることでした。」が筆者の主張で、もともとの日本の芸術と、現代の芸術とを対比させていることが分かる。

「たとえば」以下がその具体例。具体例は筆者の主張を裏付ける証拠として挙げられたものなので、「もつとも主張している箇所」ではない。

問題IV

目標

- 一 論理的に考えることができるかどうか。
- 二 自分の考えを筋道を立てて説明できるかどうか。

■解答

- 問一 そうじは女の子の仕事である。
- 問二 今は男女平等の世の中なので、そうじも女の子がやるものとは決まっていない。

■解説

問一 論理的読解A「要点を掴まえる」

男の子が「そうじは女の子の仕事」と言って、花子さんを相手にしなかったとある。

問二 論理的表現力「自分の意見やその理由を書く」

「そうじは女の子の仕事」に対する反論なので、論理的に考えれば、「そうじは女の子の仕事ではない」となります。その理由をたとえば「男女平等」など、自分で考えなければならぬ。

以上